HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | WAS構文の構造と用法について |
| Author(s) | 荻原, 達夫 |
| Citation | 独語独文学科研究年報, 22, 11-27 |
| Issue Date | 1996-01 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/26020 |
| Type | departmental bulletin paper |
| File Information | 22_P11-27.pdf |

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

# WAS 構文の構造と用法について

荻原達夫

## 0. はじめに

本稿では（1）のような，文頭に was を有し，かつ主文動詞が間接疑問文を従えている構文（以下 was 構文）の構造および用法について考察する．

（1）Was glauben Sie denn, wer das war? (Kaviar)

具体的には，1）was 構文の統語特性はどのような構造に起因しているのか，2）was 構文がよく用いられるのはどのような場合なのか，3）was 構文の構造と用法の関係はどのようになっているのか，の 3 点を明らかにする．

## 1. WAS 構文の統語構造

### 1.1 2 つの統語特性

#### 1.1.1 文頭の was

Was 構文の文頭には一見して余計とも思える was がある．なぜ余計かというと，それは以下のように考えられるからである：例えば（1）の主文動詞 glauben は主題役割（thematische Rolle）に関して Experiencer と Proposition を項に与える．ところが前者は Sie に，後者は wer das war にそれぞれすでに与えられている．よって was に与えられるような主題役割はもはや残っていない．つまり was は主題関係上余計である．

ただしこれが本当に余計なのかどうかには議論の余地がある．余計な要素はふつう意味解釈上の問題を引き起こすからである：

（2）*Wer bist du gekränkt, wenn ich mit meinem Kind spreche?

この場合 wer が解釈上余分で，文全体の中でいかなる意味役割も持ちえない．また wer は虚辞 Expletiv ではないので解釈の過程で無視することもできない．結局（2）では wer が邪魔になって文意がどうしても判然としない．このことは（3）が問題なく解釈できることを考え併せるともっとはっきりする．Wer だと解釈上の余りが生まれるが，wieso にすると完全解釈が成立するからである．

（3）Wieso bist du gekränkt, wenn ich mit meinem Kind spreche? (Frisch)

このように議論を進めると（1）の was は解釈上の困難を是非とも引き起こさなければならないことになる．が，実際にはそうなっていない．（1）の解釈が決まらないなどということはないからである．逆に（2）を（3）に作り変えたときの操作を（1）に適用すると非文法的な文ができてしまう．

（4）*Warum glauben Sie denn, wer das war?

これは一種の Dilemma である: 1) もし (1) の was の余剰性が許されるのであれば，文法は余分な要素を任意に省いて解釈することができることになり，完全解釈の原理 (Chomsky 1986) は破棄されなければならない; 2) 反対に余計な was を認めないとすると (1) の形が文として成立しているのは謎ということになってしまう. 1) にせよ 2) にせよ具合の悪い結果をともなっている. この Dilemma を逃れるには完全解釈の原理を破棄することなしに (1) の成立を説明できるような統語構造を仮定しなければならない.

### 1.1.2 補文としての間接疑問文

文頭の was と並んでこの構文に特有なのは補文として生じているように見える間接疑問文である.

疑問文はそれが主文として機能する直接疑問文であればそのふるまいに文法的規制はかからない. これに対し補文として Matrixsatz に埋め込まれるときには一定の制限が課される. 主文動詞の性質が関わってくるからである. つまり補文を取る動詞という点では共通していてもその中身は一様ではなく，次の表からわかるようにいくつかのタイプが存在しているのである (Eisenberg 1989 を参照).

| 動詞のタイプ | 代表例 | 補文のタイプ |
|---|---|---|
| I 型 | fragen | ob 文, w 文 |
| II 型 | glauben | daß 文 |
| III 型 | verstehen | daß 文, w 文 |
| IV 型 | wissen | daß 文, ob 文, w 文 |

表中の ob 文, daß 文, w 文はそれぞれ ob, daß, 疑問詞に導かれる補文を意味している. 間接疑問文というとき問題になるのはこのうち ob 文と w 文であるから，少なくともこの表からは I, III, IV 型の動詞と間接疑問文は相性の良いことが確認できる:

I 型: Zum ersten Mal in ihrem Leben dachte sie, daß es fast unmöglich war, auf einer Welt zu leben, ohne wenigstens zu fragen, woher sie stammte. (Sofies Welt)

III 型: Lieber Freund, ich begreife nicht ganz, warum Du mir diesmal nicht hast helfen wollen, gerade dieses eine Mal, wo ich Dich wirklich brauchte. (Rinser)

IV 型: Wissen Sie, warum die Hammond-Stiftung so viele Dinosaurierprojekte unterstützt? (Dino)

II 型では間接疑問文はふつう無理である.

II 型: *Karl glaubt, wen du schickst.

ただしこれには注意が必要で次のような例では形の上で w 文が生じているが，これは間接疑問文ではなく freier Relativsatz と解釈すべきである.

(5) a. Karl glaubt, wem du traust.

b. Karl glaubt, was Emma weiß.

c. Und so geschah es, daß Grenouille zum ersten Mal in seinem Leben seiner Nase nicht traute und die Augen zuhilfe nehmen mußte, um zu glauben, was er roch. (Süskind)

よって (5) のような例を除くと II 型の動詞には疑問詞に導かれる文は一般に接続しないことになる.

ところがこれには反例がある. Was 構文がまさにそれで, (1) からも明らかなように II 型動詞が w 文を従えている. この w 文は freier Relativsatz とは解釈できない. 従ってここでも一つの Dilemma が発生する: 1) Was 構文を a priori に是とするのであれば上の表にまとめられた事実が非ということになる; 2) 一方, 表の方が正しいとみれば, was 構文の w 文が不可解になってしまう. この 1) か 2) かという Dilemma を解くには表のような分類と両立するように, すなわち II 型動詞の性質に変更を加えることなしに was 構文の統語構造を設定しなければならない.

## 1.2 LF 移動分析

### 1.2.1 Skopusindikator と演算子の LF 移動

1.1 で提示した問題に対する解答として, LF での演算子移動を仮定する分析がある. Stechow/Sternefeld (1988) および McDaniel (1989) の議論がこれに相当する. この議論は大体以下のように進められる:

まず was 構文の was は演算子の作用域を S 構造で表示する Skopusindikator と解する. そしてこの場合 was は文字通り Indikator にすぎないから演算子の本体はどこにあるかというと補文の CP 指定部で停止している:

(6) was$^1$ glauben Sie denn [wer$^1$ [das war]]

右肩の数字は作用域束縛 (Skopusbindung) の関係を表す. つまり was$^1$ の "1" は was が自分と同じ数字を付与されている演算子 (ここでは wer$^1$) の作用域を表示している, ということを意味するものとする. そして S 構造におけるこの束縛関係は LF に入るまでに解消されなければならない. すなわち演算子本体が was の表示している演算子位置に移動し, 自ら作用域を表示する形を完成しなければならない. 従って (6) の wer は LF 移動を起こし, (7) の a あるいは b のどちらかの LF 表示を作り出す. なお下付数字は移動にともなう指標付けの結果なので作用域束縛とは関係がない.

(7) a. wer$_2$ glauben Sie denn [$t_2$ [das war]]

b. wer$_2$-was glauben Sie denn [$t_2$ [das war]]

Skopusindikator の was を削除して, そこに wer を代入すると考えると (7a) になり, 削除を行わ

ず，was を LF-Suffix (Chomsky 1991) と解釈すると (7b) になる．Stechow/Sternefeld は前者を採用し，McDaniel は後者を示唆している．LF-Suffix の性質に関しては不明確な点が多いので，ここでは (7a) のみを取り上げることにする．(7a) を見ると，まず 1.1.1 で明らかになった問題点すなわち was の余剰性をどう処理するか，が解決されていることがわかる．LF 表示ですでに was が削除されているから解釈上の余剰性は存在せず，完全解釈の原理と両立する．また 1.1.2 で考察した，II 型動詞が示す間接疑問文の接続不可能性も，Lasnik/Saito (1984) の COMP の素性に関する仮定を採用せず，LF 以降のレベルで関与してくる制約であると仮定すれば，(7a) ではもはや w 文が補文とはなっていないからここでも Dilemma は解消されている．結局 LF 移動分析は 1.1 で提示した問題を残らず解決している．

### 1.2.2 LF 移動分析の問題点: 演算子の作用域

その代わりこの分析はしかし，以下で見るように，演算子の作用域に関して別の問題を生じてしまうという欠点を併せもっている．

Stechow/Sternefeld は was のことを "Dieser [Skopusindikator = <u>was</u>] hat ja keine eigenständige lexikalische Bedeutung, sondern dient lediglich dazu, den Skopus von <u>wen</u> [本稿中の議論に置きかえれば <u>wer</u>] in der S-Struktur zu markieren" と述べている (S. 354)．だからこそ was は削除されなければならないし，また wer も移動しなくてはならない．ただ，ここでさらにもう一つ別のタイプの演算子を加えてその相互作用を観察すると，この移動分析の問題点が見えてくるのである．例えば (8) のように主文に演算子の一種である数量詞 jeder が含まれている場合，どちらの演算子がより広い作用域をもつかは LF 表示が決定することになるが，もし wer に LF 移動が適用されるのであれば，それは (9) のようになり，疑問詞が数量詞よりも広い (wer > jeder) か，もしくは同程度の広さという解釈をもつことになる．

(8) Was sagt jeder, wer das war?

(9) $wer_2$ [sagt jeder [$t_2$ [das war]]

作用域に関する語感は概して微妙で簡単に割り切ることはできないが，そのことを差し引いたとしても (8) の作用域は実際は jeder > wer である．あくまで LF 移動分析に固執するのであれば，この演算子の相互作用は説明がつかないし，また逆に相互作用の実際を信頼すると wer の LF 移動はあってはならないことになる．LF 移動分析が引き起こす新たな問題とはこの Dilemma のことである．

### 1.2.3 非 LF 移動分析

#### 1.2.3.1 WAS の再解釈

こういう問題を回避するには LF 移動の仮定を捨て去ればよい．ここでは動的あるいは移動による

派生的問題解決よりもむしろ構造そのものを工夫して静的ないし表示的に問題を把握していきたいと思う．構造から直接 1.1 の問題を整理する可能性を探るのである．

まず was の問題から．この「余計な」was は本当に余計なのか．LF 分析の Stechow/Sternefeld はこれを最終的に削除すべきものと考えていた．LF 表示で余剰構成物になるからである．しかしもし was が全体から見て余りなどではなく，適切な文法機能を担っている一成分だという前提で議論を進めるとしたら，この構文の構造自体を組み換える必要が生じてくることになろう．ここでは（1）の文は（10）に“|”で示したように構造上一旦切れているとみる．

（10）was glauben Sie denn | wer das war?

“|”で切れているからその左側の構造はその内部でまとまっていなければならない．そうだとすると，この部分だけで動詞のもつ統語的意味的フレームは満たされることになる．すなわち was が目的語/Proposition で，Sie が主語/Experiencer である．こうすると（10）の was は文肢の一つと見なすことができ，was に関する余剰性の問題は消えてなくなってしまう．

1.2.3.2　間接疑問文の再解釈

ところが今度は“|”の右側が構造的に浮遊する結果になるので，このままでは問題の箇所をズラしただけで終わってしまう．そうならないためには was だけでなく，1.1.2 で見た間接疑問文の問題も再解釈しなければならない．

II 型動詞に対する間接疑問文接続という問題はこの間接疑問文を主文動詞の補文だと仮定したときに発生する問題であった（II 型動詞を $V_{II}$ とする）：

（11）[... [$V_{II}$ [w ...]]]

これは 1.1.2 の動詞分類表によればあってはならない組み合わせである．Lasnik/Saito（1984）の議論も同様の制約を補文の COMP に関して立てている．先に見た Stechow/Sternefeld はこの制約を緩めることで（11）の形が可能であるとしたが，LF 分析にやや無理があるとなった以上この制約緩和の根拠は弱くなったと言わざるをえない．従ってここは無理をせず（11）は許されない形であると認めた方がよい．

（11）が不可能なのであるから別の構造を立てなければならない．補文になっては都合が悪いのだとすると（12）のような付加構造が適当であろう．

（12）[[... $V_{II}$] [w ...]]

（12）では w 文が動詞の補文になっていないので II 型動詞の補文選択制約は問題にならない．ただしこのままでは w 文のもつ地位が不明確である．相関詞を補ってはっきりさせると：

（13）[[... [dar$^{1}$über] $V_{II}$] [w ...]$^{1}$]

上付数字は相関関係を表す．（13）の構造を基礎として設定し，これから相関詞 darüber を省略す

るとあたかも動詞が補文として間接疑問文を従えているように見える形が発生する．これが was 構文の間接疑問文をめぐる問題の原因なのである．

1.2.3.3 WAS 構文の構造

結局 was 構文（1）は次のような構造をもっていると考えられる．

（14）was glauben Sie denn darᵢüber [wer das war]ᵢ

（10）の“|”はちょうど（14）の darᵢüber の後ろに入ることになるが，darᵢüber は（3）の wieso と同じく付加成分なので，“|”の右側の構造に参与しても解釈上の問題を生じない．構造（14）は 1.1 で取り上げた 2 つの問題を解決し，かつ LF 移動分析のもつ問題点からも自由だという点でより適切な構造といえよう．

## 2. WAS 構文の用法

前節では was 構文の統語構造を決定した．本節では視点を変え，用法からみた was 構文の特性を明らかにする．

### 2.1 データ分析

Was 構文の用法を明らかにするため，以下では実際のテキストで用いられている was 構文をいくつかの観点から分析する．分析の土台になるのは，7 つの小説および 1 つのエッセイから収集した合計 25 の文例である．なお，“[ ]”は文例番号を表し，文例は論文の最後に前後の文脈を含めて引用してある．

#### 2.1.1 主文動詞

まず，文例中の was 構文がどんな動詞を主文動詞としてもっているかを調べる．

Was meinst du, was bei mir jetzt los ist, Kind! [1]

Was denkst du, wohin sie ziehen wollen? [3]

Was glauben Sie, was da drin ist? [4]

文例中に現れた動詞はこの 3 つである．ただし，meinen と denken が数でいうと 1 つずつなのに対し glauben は 23 と圧倒的に多いことがわかる．II 型動詞がこの構文に適していることにまちがいはないが，その中でも glauben が使用数では群を抜いている．

#### 2.1.2 主文の主語

次に何が主文の主語になっているかをみる．

Was glaubst du wohl, wieviel Zeit mir noch bleibt? [7]

Was glauben Sie, wie viele Chemiker die Metaplast Corporation hatte? [8]

Was zum Teufel glaubt sie eigentlich, wer sie ist? [6]

文例中に現れたのはこの 3 種類である．数的には Sie が 17, du が 7, sie が 1 で，Sie と du を合わせた 2 人称が 24 となり，3 人称（sie）の 1 に比べてはるかに多いことが確認できる．この構文が主として会話（対話）の中に現れていることもこの結果に寄与しているかもしれない．この構文の強い「対 2 人称性」を物語るものといえよう．

### 2.1.3 文末の符号

文末にどんな符号が付けられているかという点から調べてみると興味深い観察結果がえられる．

Was glauben Sie denn, was Geisteskrankheit ist? [9]

Was glaubst du, was die uns erzählt haben! [12]

Was glauben Sie, was ich verdienen könnte, wenn (...) ... [13]

文例中では ? で終わっているものが 16, ! が 7, 特に付けられていないものが 2 あった．形式上は疑問文であるにもかかわらず ? 以外を付けられているものが 4 割近く（38%）に達する．Was 構文は純粋な疑問文というよりもやや反語的修辞的疑問文のような性格が強いと思われる．

### 2.1.4 主文に現れる Modalpartikel

さらに was 構文の主文に現れた Modalpartikel（以下 MP）を調べてみると 2.1.3 の考察を裏付けるような結果がえられる．

Was zum Teufel glauben Sie eigentlich, warum Sie hier sind, (...) [2]

Was glaubst du denn, warum ich mich an dich rangemacht habe? [18]

Was glauben Sie wohl, wie ich dahinkomme? [10]

MP は 25 例中 10 の例に現れた（ちょうど 4 割．2.1.3 の ! の文例とは完全には重なっていない．MP あるいは ! のどちらかに該当しているものを合計すると 18 になり，全体の 7 割強（72%）に達する）．内訳は eigentlich が 2, denn が 6, wohl が 2 となっている．このうち denn は「疑問文に用いられ，その疑問に対する話者の関心の深さを示」したり，「純粋な疑問文ではなく，疑問文から転じた感嘆文に用いられて，話者の <驚き> <意外> の気持を示」したりする機能をもっている（岩崎/小野寺，共編『ドイツ語不変化詞辞典』強調は荻原）．Eigentlich にも似たような働きがあり "drückt bes. in Fragesätzen verstärkte Anteilnahme, einen verstärkten Vorwurf aus" (Duden, Deutsches Universalwörterbuch)．また Knaurs Grammatik der deutschen Sprache (S. 324) によれば "Wesentlich für den Charakter rhetorischer Fragesätze" として次のような MP の使用

が指摘されている: auch, bloß, denn, eigentlich, schon, vielleicht, wohl (強調は荻原). 符号 "!" の使用とともにこれらの MP の使用頻度が was 構文において高いということは 2.1.3 の分析結果と同様この構文の修辞疑問的性格を示唆していると考えられよう.

2.1.5 Sprecher の心理状態.

2.1.3 および 2.1.4 からこの構文のふつうの疑問文とはやや異なるニュアンスが確認できるが, このことはさらに前後の文脈からこの構文を使っているときの Sprecher の心理状態を読み取ることでもっと明らかにできるかもしれない.

"Was zum Teufel glauben Sie eigentlich, warum Sie hier sind", hörte man Gennaros Stimme. Er klang sehr wütend. [2]

"Der Teufel soll sie holen!" / "Beruhige dich", sagte Harry, "laß doch, beruhige dich, Norman." / Was zum Teufel glaubt sie, wer sie ist?" [6]

"Was glauben Sie denn, was Geisteskrankheit ist?" fragt er verärgert. [8]

Sie weinte jetzt wieder. (...) "(...) Was glaubst du, was die uns erzählt haben! (...)" [12]

Was glauben Sie, Sie lahmer Sack, was mit Ihnen passiert, wenn (...), Mensch? Habe ich es denn nur mit Idioten zu tun? [17]

Laut und ordinär klang nun ihre Stimme: "Guck nicht so vertrottelt, Mensch! Was glaubst du denn, warum ich mich an dich rangemacht habe?" [18]

どれをみても Sprecher の感情の昂りがよくわかる. 特に [17] は MP や "!" といったシグナルが付されていないのにもかかわらず, 文脈からかなり激しい反語調であることがみてとれよう.

2.1.6 呼びかけ

2.1.2 でみた was 構文の「対 2 人称性」を示すほかの例として相手に対する呼びかけ表現の使用がある.

Was meinst du, was bei mir jetzt los ist, Kind! [1]

Was glauben Sie denn, was wir am Körper haben, junger Freund! [16]

Was glauben Sie, Sie lahmer Sack, was mit Ihnen passiert, wenn (...)? [17]

Was glauben Sie, was die seither Plutonium brauchten für ihre fucked-up Sprengköpfe, Mister? [22]

Was 構文には話し相手の注意を強く引き付けようという意図があるといえるかもしれない.

2.1.7　質問－応答コミュニケーションの成立可能性

疑問文は一般に自分が「知っていることと知りたいこと」を相手に伝え，必要な情報を相手から成功裡に引き出すことを目指すための言語表現である，と定義できよう（植木 1993 を参照）．だとすると純粋の疑問文が発せられている場合には質問－応答というコミュニケーションが成立するのが理想的な形ある．ところがこの点に関して was 構文はやや趣を異にしている．25 の例のうち質問－応答の関係が成立しているらしいのは 8 例にすぎない（3 割と少し）からである．従って was 構文は質問－応答の成立可能性に関してふつうの疑問文とは異なっているとみるべきであろう．極端な例すなわち was 構文にプロトタイプ的なものがあるとしたら，それは応答を強く要求しないあるいは全く要求しない反語的修辞疑問文ということになるかもしれない．これは 2.1.3 ～ 2.1.5 までの観察と一致する．実際，応答を与えると皮肉に皮肉で答えるような，とぼけた感じが生じてしまうことが多い．

Was zum Teufel glauben Sie eigentlich, warum sie hier sind?

-- Ich weiß ziemlich genau, warum ich hier bin. [2]

Was glauben Sie denn, was Geisteskrankheit ist? (fragt er verärgert)

-- Das ist eine seltsame, eigenartige Krankheit, die manche Menschen haben. (sage ich aufrichtig.) [9]

Was glaubst du, was die Griechen und Indochinesen machen werden, wenn sie draufkommen, was passiert ist?

--- Sie werden uns umlegen, wenn sie uns erwischen. [19]

[2] では was 構文に応答をした結果この後 was 構文を言った方の人物をますます怒らせてしまうし，[9] も最初の Sprecher（精神科医）が不機嫌な気分で was 構文を発したのに対し，「誠実に（aufrichtig)」答えて，ますます医師の機嫌を損ねてしまう．[19] ではわかりきっていることをわざわざ口に出すというニュアンスが感じられ，このことは逆に答えの要らないところにあえて返答しているという解釈にもつながる．以上のことからもやはり was 構文は反語的修辞疑問文が基本的性格なのではないかという推定が成立するであろう．

2.1.8　会話の流れ

2.1.7 の議論を裏返せば次のことも成り立つ：was 構文が対話の途中で使用されたとき，これに直接答えなくとも会話は支障なく進行する，あるいは was 構文に返答しないことが会話の流れを妨げる結果にはならない．具体例をみると was 構文を発した本人自らが質問－応答の両方を行うことで質問が自己解消的に片付けられたり，

Was glaubst du, was die uns erzählt haben! 750 000! Ein Irrsinn! haben die

gesagt. Das wollten sie sie nicht riskieren! [12]

Abel antwortete: "Was glauben Sie denn, wer das war? Moskau natürlich!" [20]

あるいはそれすらせずとも問題なく会話が進行している例も認められる．次がその例である（文例番号［14］．原文通りに改行し，説明のために記号・番号を付ける）．

Auch der Mixer sah der Dame zu. "So etwas von Pech", sagte er mitleidig.

<A1> "Wer ist das?"

<B1> "Verrückte Spielerin. Was glauben Sie, was sie schon verloren hat!"

<A2> "Wie heißt sie?"

<B2> "Estrella Rodrigues."

<A3> "Verheiratet?"

<B3> "Verwitwet. Der Mann war Anwalt. Wir nennen sie Konsulin."

<A4> "Warum?"

<B4> "Na, weil sie eine ist. Konsulin von irgend so einer Bananenrepublik."

<A> "Aha."

1 人（A）がまず質問をする（A1）．それに対してもう 1 人（B）が応答する（B1）．その際 B から was 構文が発せられるが A はそれに構わず自分の質問を続ける（A2）．B も別に腹も立てず平然とそれに返答する（B2）．以下 A4－B4 まで質問－応答は続くが別に不都合は生じていない．もし B1 の was 構文をふつうの疑問文に置き換えたら（例えば was hat die schon verloren?），こうスムーズには会話は運ばないだろう．用法に関して was 構文がふつうの疑問文とちがっている点はこのようなところにも見いだせるのである．

### 2.1.9 Sprecher の意図

最後に Sprecher は was 構文を使うときどんな意図をもっているのか考えてみる．1 つはこれまでの分析から明らかなように特定の質問行為を意図せずむしろ反語的修辞疑問を発することが主たる意図であったといえよう．こういう意図をもっているからこそまともに返答すると上でみたようにおかしなことになるのである．

ただしこれとは別にかなりふつうの疑問文に近い例もないわけではない．

Was denkst du, wohin sie ziehen wollen? -- Ich weiß es nicht. [3]

Was glauben Sie, was da drin ist? -- Keine Ahnung. [4]

文脈からもこれらの was 構文が特に反語的表現になっているとは解釈できない．その意味でふつうの疑問文に近いのである．しかしながら一つだけここからわかるのはふつうの疑問文に似た機能を有するときは was 構文は相手の考え・意見を質す疑問文として機能するということである．単に情

報を得たいだけなのであれば，wohin wollen sie ziehen? あるいは was ist da drin? とすれば済むところを相手の意見を聞く形にして幾分やわらかい感じのする質問を形成している．つまり Sprecher の意図は Hörer の意見をきくことにもあるということになる．だから上の 2 例では答えが返ってもきてもおかしくないのである．Ich weiß es nicht も keine Ahnung も wohin, was に答えているのではなくて was glaubst du?; was glauben Sie? に答えていると解釈すべきであろう．

2.2 分析結果からみた was 構文の用法

2.1 の諸分析から was 構文は次のような用法的特性をもっていると考えられる．

1) 相手の注意を強く引き付ける「対 2 人称性」

2) ふつうの質問行為を意図しない反語的修辞疑問性

これが was 構文の使用される典型的な状況である．さらに，

3) 意見・考えを質す

という働きももつ．実際にはこの 3 点が複合し，どれかが強くなったり弱くなったりして微妙なニュアンスを作り出しているものと思われるが，少なくとも用例を検討した結果， was 構文にこの 3 つの性質が認められるのは確かである．

3. 構造と用法の関係

本稿は 1 において was 構文の構造を確定し，2 においてその用法を明らかにした．まず構造を再掲する（15）．

(15) was glauben Sie denn da'rüber [wer das war]'

これから下線部を削除すると最終的な形（16）（＝(1)）が完成する．

(16) Was glauben Sie denn, wer das war?

用法に関してはすでにみたとおり「対 2 人称性」および「反語的修辞疑問性」または「意見思考を問い質す」という性質の 3 つの要因があった．ここでこの 3 つの要因を順に F(1), F(2), F(3) とする．構造（15）がこの 3 つの F とどのように関係しているかを検討するのがこの節の目的である．

3.1 F(1) と構造

構造上 F(1) を反映している部分を下線で示すと（17）のようになる．

(17) was glauben Sie denn dar'über [wer das war]'

Was 構文に一定してみられる傾向としての F(1) は，主文主語という定義上，構造的につねに局所化されている．

3.2 F(2) と構造

F(2) の内容を構造に直接対応させるのはむずかしいが，F(2) を抽出するうえで一つの手がかりとなった MP の生起から推定すると F(2) は (18) のように解釈できるかもしれない．

(18) was glauben Sie denn dar'über [wer das war]'

MP (ここでは denn) はそれがかかる節 (clause) を強める働きがある．従ってその節全体が構造上対応していると考えるのである．これは強調不可能な節に MP が出現できないことからも間接的に支持されるであろう．

(19) *Was, glauben Sie denn, hat er getan?

(19) では意味上弱い部分である挿入節が強調を受けており，文がおかしくなっている．

3.3 F(3) と構造

F(3) については明らかである．

(20) was glauben Sie denn dar'über [wer das war]'

相手の考え・意見を聞くのであるから (20) のような対応をもっているはずである．

3.4 F(1) ～ F(3) と構造

3.1 から 3.3 までの考察をまとめると (21) のようになる．

(21) was glauben Sie denn dar'über [wer das war]'

F(1): ---

F(2): ----------

F(3): ----------

結局どの用法上の要因も 1 で行った構造組み換え ($[V_{11}\ [w\ \ldots]] \rightarrow [V_{11}][w\ \ldots]$) の結果と適合していることがわかる．つまり構造の切れ目と用法上の特性がうまく対応しているのである．これは取りも直さず統語論的に確定された構造と文例分析から抽出された用法特性が最終的に一致していることを示していよう．

4. まとめ

本稿では was 構文の構造および用法を調べ，次のような結果をえた．

(I) 構造: was glauben Sie denn dar'über [wer das war]' ただし下線部は最終形では削除される．

(II) 用法: 1) 相手の注意を強く引き付ける「対 2 人称性」

2) ふつうの質問行為を意図しない反語的修辞疑問性

3) 相手の意見・考えを問う

さらに（I）と（II）が対応関係をもっていることも明らかになった．いわば構造に関する考察と用法に関する分析が折り合っていることになり，これはお互いの結論を補強し合うものといえる．結局本稿を通して明らかになったのは was 構文が構造的にも用法的にも非常に興味深い性質をもっており，しかもそれがお互いに無関係ではないということなのである．

WAS 構文文例（強調は原文による．"(...)" は引用者による省略を表す）

[1] Er machte eine fahrige Bewegung mit der Hand und setzte sich schwer neben Momo auf die Treppe. / "Was meinst du, was bei mir jetzt los ist, Kind! Das ist nicht mehr wie früher. Die Zeit verändert sich. (...) Da ist alles organisiert, jeder Handgriff, verstehst du, bis ins letzte hinein ..." / Er redete weiter, und Momo hörte ihm aufmerksam zu. (Momo:81)

[2] "Was zum Teufel glauben Sie eigentlich, warum Sie hier sind", hörte man Gennaros Stimme. Er klang sehr wütend. / Ich weiß ziemlich genau, warum ich hier bin", erwiderte Malcolm. / "Sie sind hier, um mich zu beraten, und nicht um irgendwelche beschissenen Gedankenspielchen zu treiben. (...)" (Dino:195)

[3] "Wandern!" rief Ellie. "Das ist ja phantastisch." / "Ja", erwiderte Grant. Er grinste. / "Was denkst du, wohin sie ziehen wollen?" fragte sie. / "Ich weiß es nicht", antwortete Grant; ... (Dino:526)

[4] "Muß wohl so sein, Sir", (...) "Denn in Wirklichkeit spüre ich, wie mein Herz klopft, Sir. Was glauben Sie, was da drin ist?" / "Keine Ahnung", sagte Norman. (Gedanken:139)

[5] "Sagen Sie mir, sehe ich verändert aus, Norman?" / "Nein." / "Genau wie vorher?" / "Aber ja." / "Sind Sie sicher?" beharrte Harry. Er sprang auf, stellte sich vor einen Spiegel und betrachtete aufmerksam sein Gesicht. / "Was glauben Sie denn, wie Sie aussehen?" fragte Norman. / "Ich weiß nicht. Anders." (Gedanken:173)

[6] "Der Teufel soll sie holen!" / "Beruhige dich", sagte Harry, "laß doch, beruhige dich, Norman." / "Was zum Teufel glaubt sie eigentlich, wer sie ist?" / "Na komm, setz dich erstmal hin, Norman." (Gedanken:299)

[7] Rachael fragte: "Weißt du eigentlich, wie lange ein humanoider Roboter wie ich zu leben hat? Ich existiere jetzt seit zwei Jahren. Was glaubst du wohl, wieviel Zeit

mir noch bleibt?" / Nach kurzem Zögern sagte er: "Ungefähr zwei weitere Jahre." / "Dieses Problem haben sie nie lösen können. Ich meine die Erneuerung der Zellen --- eine automatische oder wenigstens halbautomatische Zellerneuerung. Nun, so ist das eben." (Blade:155)

[8] Wie viele Chemiker arbeiteten bei Ihnen im Labor?" / "Bei uns arbeiteten sechs Chemiker." / "Was glauben Sie, wie viele Chemiker die Metaplast Corporation hatte?"/ "Oh! Die müssen eine richtige Chemie-Abteilung gehabt haben!" (Feynman:75)

[9] Dann fragt er: "Ist irgend jemand aus Ihrer Familie in einer Nervenheilanstalt?" / "Year, eine Tante von mir ist im Irrenhaus." / "Warum nennen Sie das Irrenhaus?" fragt er vorwurfsvoll. "Warum nennen Sie es nicht Nervenheilanstalt?" / "Ich habe gedacht, das sei dasselbe." / "Was glauben Sie denn, was Geisteskrankheit ist?" fragt er verärgert. / "Das ist eine seltsame, eigenartige Krankheit, die manche Menschen haben", sage ich aufrichtig. (Feynman:211)

[10] "Aber wir sind davon ausgegangen, daß wir Belege bekommen, um die Ausgaben zu beweisen." / "Ich habe nichts, um sie zu beweisen, aber Sie wissen doch, daß ich in Los Angeles wohne und daß ich in die anderen Städte reise; was glauben Sie wohl, wie ich dahinkomme?" (Feynman:396)

[11] Der Stiefvater lief nicht nackt herum, aber er kam immer ins Badezimmer, wenn Teresa in der Wanne lag. Als sie sich deswegen einmal einschloß, machte die Mutter einen Skandal: "Für wen hältst du dich eigentlich? Was glaubst du denn, wer du bist? Er wird dir deine Schönheit schon nicht weggucken!" (Leichtigkeit:46)

[12] Sie weinte jetzt wieder. Thomas trocknete ihr Tränen. / "Dann hast du 750 000 verlangt. Da haben wir ein Blitzgespräch mit Washington angemeldet! Was glaubst du, was die uns erzählt haben! 750 000! Ein Irrsinn! haben die gesagt. Das wollten sie nicht riskieren! Und da setzten sie dann mich an ..." / "Dich an", wiederholte er idiotisch. (Kaviar:25)

[13] "Mein Koch ist mir davongelaufen, Jean", klagte Jeanne ihrem deutschstämmigen Mieter, den sie für einen waschechten Pariser hielt und schon am zweiten Tag seiner Anwesenheit mit seinem hübschen Vorname ansprach. "Und die Lebensmittel werden immer knapper. Was glauben Sie, was ich verdienen könnte, wenn das Restaurant funktionieren würde ..." (Kaviar:75)

[14] Wieder hatte die Dame in Rot verloren. Thomas sah, daß der Mixer den Kopf schüttelte. / Auch der Mixer sah der Dame zu. "So etwas von Pech", sagte er mitleidig. /

"Wer ist das?" / "Verrückte Spielerin. Was glauben Sie, was die schon verloren hat!" / "Wie heißt sie?" / "Estrella Rodrigues." / "Verheiratet?" / "Verwitwet. Der Mann war Anwalt. Wir nennen sie Konsulin." / "Warum?" / "Na, weil sie eine ist. Konsulin von irgend so einen Bananenrepublik." / "Aha." (Kaviar:112)

[15] "O heilige Jungfrau", sagte der Bärtige. "Wo ich doch keine Pässe mehr habe!" / Thomas sagte aufgebracht: "Von den siebenundvierzig alten Pässen, die ich Ihnen brachte ..." / "Wann brachte? Vor sechs Wochen? Was glauben Sie, wie es bei mir zuging? In vierzehn Tagen war alles weg! Es tut mir wirklich leid --- aber ich habe keinen mehr da! Keinen einzigen! Das wollte ich Ihnen schon die ganze Zeit erklären!" (Kaviar:185)

[16] "Sie müssen sich ausziehen", sagte Dupont. "Ich will sehen, was Sie in den Kleidern haben. Und am Körper." / Bergier kicherte: "Was glauben Sie denn, was wir am Körper haben, junger Freund!" Er trat vor und öffnete seine Weste. "Kommen Sie, durchsuchen Sie mich mal nach Waffen!" Er nahm die Krawatte ab und knöpfte das Hemd auf. (Kaviar:234)

[17] Sofort tobte Bieselang los: "Zu dämlich zum Runterfallen, Nummer sieben, was?" Sie hatten hier alle Nummern, es wurde keine Namen genannt. "Was glauben Sie, Sie lahmer Sack, was mit Ihnen passiert, wenn Sie erst bei 'ner ordentlichen Böe mit 'm Schirm runterkommen, Mensch? Habe ich es denn nur mit Idioten zu tun?" (Kaviar:276)

[18] Christine Troll fuhr herum. Ihr blasses, ebenmäßiges Madonnenantlitz war verzerrt. Laut und ordinär klang nun ihre Stimme: "Guck nicht so vertrottelt, Mensch! Was glaubst du denn, warum ich mich an dich rangemacht habe?" / "Rangemacht ...", wiederholte Thomas schwach, während er dachte: Werde ich alt? Bin ich bereits halbstarken Gören nicht mehr gewachsen? (Kaviar:444)

[19] "Jetzt wird es langsam Zeit für uns, abzuhauen, alter Junge", sagte Thomas am 14. Mai 1948 zu Bastian. / "Was glaubst du, was die Griechen und Indochinesen machen werden, wenn sie draufkommen, was passiert ist?" / "Sie werden uns umlegen, wenn sie uns erwischen", sagte Thomas Lieven. / Die Waffenhändler erwischten Thomas und Bastian nicht. (Kaviar:469)

[20] NUMMER 17: "Das ist so, Euer Ehren." / BYERS: "Fiel das den FBI-Agenten nicht auf?" / NUMMER 17: "Doch. Manche ließen sich das Gerät genau erklären. Sie hielten Abel für einen Amateurfunker. Einmal begann der Apparat sogar zu arbeiten, während Abel einen FBI-Agenten malte. Abel funkelte kurz zurück. Der Apparat verstummte. Der FBI-Agent

fragte: "Wer war denn das?" --- Abel antwortete: "Was glauben Sie denn, wer das war? Moskau natürlich!" / Lautes Gelächter. (Kaviar:523)

[21] "Zuerst! Weil wir vom Betreiber zuerst einen Normal-Fall gemeldet bekamen. Von denen gibt's inzwischen vier-, fünftausend. Wenn wir die jedesmal bekanntgegeben hätten ..." / "Wäre es längst aus mit euerm Geschäft." / "... wären wir unverantwortliche Panikmacher." Marvin keuchte. "Was glaubst du, was Tag für Tag im Flugverkehr an N-Fallen passiert? Geben die Piloten das den Passagieren bekannt?" (Lerche:14)

[22] Er wies mit einer Hand zu dem Reservat hinüber. "Da, der T-Reaktor, sehen Sie den, Mister?" / "Ja." Marvin fotografierte. / In dem haben sie im Krieg das Plutonium für die Nagasaki-Bombe hergestellt. So lange arbeitet das Ding schon. Mehr als vierzig Jahre! Was glauben Sie, was die seither Plutonium brauchten für ihre fucked-up Sprengköpfe, Mister? Mehr als vierzig Jahre strahlt das Ding! Können Sie sich das vorstellen? Mehr als vierzig Jahre dauert diese mörderische Sauerei hier schon. (...)" (Lerche:24)

[23] "Weiß noch nicht, ob wir die Filme dann in Abständen ausstrahlen oder nacheinander im Block. Damit es die Leute wirklich umhaut. Das Frankfurter Fernsehen ist für einen pro Woche. Absoluter Straßenfeger. Was glauben Sie, wie's Ausland kaufen wird! Das Thema überhaupt. Hab' schon Interessenten in vierzehn Ländern. Finanzierung überhaupt kein Problem. (...)" (Lerche:152)

[24] Katja war es gewohnt, daß man sie mitleidig oder irritiert musterte. "Sie meinen, ich bin zu schwach? Ha! Was glauben Sie, wieviel Kraft ich habe!" (Lerche:172)

[25] "(...) So ein BETA-Set besteht aus vielen Teilen: Kamera, Stativ, Scheinwerfern und allem, was zu ihnen gehört, Kabeln, einem Lichtkoffer, den Gurten, an denen die Akkuplatten stecken, die die Kamera laufen lassen, einem Monitor, Kassetten, Werkzeug ... Was glauben Sie, was wir mit uns rumschleppen! Großartig ist er, mein Techniker." / Katja strahlte und strich über Bernds Oberarm. (Lerche: 172)

文例出典

Brade: Philip K. Dick. Brade Runner. München.

Dino: Michael Crichton. DinoPark. München.

Feynman: Richard P. Feynman. "Sie belieben wohl zu scherzen, Mr. Feynman!" München/Zürich.

Frisch: Max Frisch. Homo faber. Frankfurt am Main.

Gedanken: Michael Crichton. Die Gedanken des Bösen. Hamburg.

Kaviar: Johannes Mario Simmel. Es muß nicht immer Kaviar sein. München.

Leichtigkeit: Milan Kundera. Die unerträgliche Leichtigkeit des Seins. Frankfurt am Main.

Lerche: Johannes Mario Simmel. Im Frühling singt zum letzten Mal die Lerche. München.

Momo: Michael Ende. Momo. München.

Rinser: Luise Rinser. Mitte des Lebens. Frankfurt am Main.

Sofies Welt: Jostein Gaarder. Sofies Welt. München/Wien.

Süskind: Patrick Süskind. Das Parfum. Zürich.

参照文献

Chomsky, N. (1986) Knowledge of Language. New York.

------- (1991) "Some Notes on Economy of Derivation and Representation." in: Freidin, R. (ed.) Principles and Parameters in Comparative Grammar. Cambridge, Mass. 417-454.

Eisenberg, P. (1989²) Grundriß der deutschen Grammatik. Stuttgart.

Lasnik, H./M. Saito (1984) "On the Nature of Proper Government." Linguistic Inquiry 15. 235-289.

McDaniel, D. (1989) "Partial and Multiple Wh-Movement." Natural Language and Linguistic Theory 7. 565-604.

荻原達夫 (1995) 『Daß 文からの疑問詞の取り出しについて』 Ms. 北海道大学.

Stechow, A. von/W. Sternefeld (1988) Bausteine syntaktischen Wissens. Opladen.

植木迪子 (1993) 『知っていること，知りたいこと』 独語独文学科研究年報 20. 267-282.

（大学院博士課程）